

37 オープンフロアである透析室での患者のプライバシー意識

長野赤十字病院透析センター

松村明子 田中奈津紀 高野直美 宮川弘美
宮本真澄 須藤のり子 市川透 出浦正
徳永真一

【はじめに】

情報化社会の到来に伴いプライバシーは社会問題として重要視されている。国際看護師協会では「看護師は看護を提供するに際し各個人の価値観・習慣・精神的信念が尊重されるような環境を助成する」¹⁾役割があると述べている。透析患者は透析中に診察を受けたり、食事をしたり、数時間をベッド上で過ごしている。しかし透析室はオープンフロアでありプライバシーが守られにくい環境にある。そこで透析患者がプライバシーについてどのように感じているかを明らかにし、個人を尊重した看護が提供できるよう研究に取り組んだ。

【目的】

1. 患者が「プライバシーが守られていない」と感じている場面を明らかにする。
2. 患者背景によるプライバシー意識の違いがあるかを明らかにする。
3. 患者がプライバシーについて感じていることを知り、今後の改善に役立てる。

【定義】

1. プライバシー：他人に知られたくない、また侵害されたくない個人情報や個人空間
2. プライバシー意識：他患に知られたくない個人情報、個人空間の認識

【方法】

1. 調査期間：2006年7月10～20日
2. 対象：当院外来維持透析患者108名
3. 方法：プライバシー志向性尺度調査および独自に作成した透析室における患者のプライバシー意識質問紙調査(10項目)を質問紙で行った。
4. 分析方法：属性別に比較しX²乗検定を用い

松村 明子 〒380-8582 長野市若里5丁目22番1号
長野赤十字病院透析センター

て分析した。

5. 倫理的配慮：質問紙は無記名で記載し、個人が特定されないようにした。結果は今回の目的以外には使用しないことを約束した。
6. プライバシー志向性尺度：「人がプライバシーを体験する状況」をどの程度志向するかについて測定する尺度
全21項目、1～7点の合計点が得点となる
7. プライバシー意識質問紙調査：透析室で患者のプライバシーに関わると思われる場面を観察し研究者4人で決定した内容を質問項目とした。

＜プライバシー意識質問紙項目＞

- 1) 仕切りのない広い空間で透析をすること
- 2) 体重測定やベッドで体重の値を声に出すこと
- 3) 体調について話すとき
- 4) 体重・水分・食事について話している時
- 5) 家族や家庭のことを話しているとき
- 6) 検査結果の説明や指導をされること
- 7) 診察や処置(注射・傷の手当て・心電図・酸素吸入)を受けている時
- 8) 周囲の人々の話し声が聞こえること
- 9) 診察や処置を受けている人の様子が見えたり聞こえたりすること
- 10) 眠りたい時・テレビを見ていたい時・食事中・読書中に話しかけられること

【結果】

回収率85%(92名)有効回答率92.4%(85名)
1. 全体の傾向(図1)
質問項目のうち「プライバシーが守られていない」と感じていたのは、1)「仕切りのない広い空間で透析をすること」で54%(85人中46人)であった。他の9項目では31%～50%の人が守られていないと感じていた。

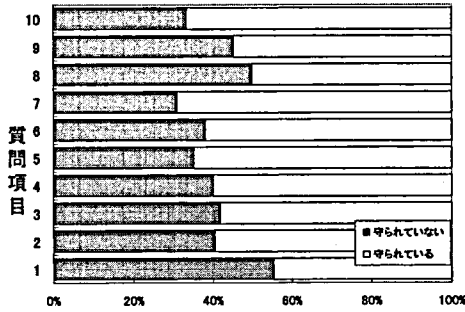


図1 全体項目比較

n=85

2. プライバシー志向性尺度得点による比較 (図2)

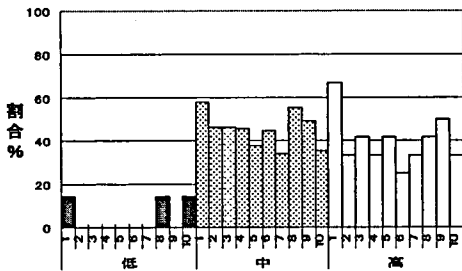


図2 プライバシー志向性尺度の得点別 守られていないと感じている人の割合

プライバシー志向性尺度の得点により3群に分けた。

低得点群 (21~63点) (プライバシー志向が低い)
 中得点群 (64~104点) (プライバシー志向が中間)
 高得点群 (105~147点) (プライバシー志向が高い)

透析患者ではプライバシー志向性尺度得点が中間群に集中していた。(85人中66名)

低得点群では86%~100% (7人中6人~7人) が全ての項目で守られていると感じていた。

中得点群では56% (66人中37人) が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」、55% (66人中36人) が8)の「周囲の人々の話し声が聞こえること」で守られていないと感じていた。

高得点群では67% (12人中8人) が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」で守られていないと感じていた。

中得点群と高得点群で差はみられなかった。

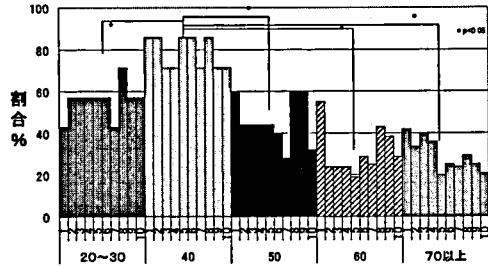


図3 年齢別比較 守られていないと感じている人の割合

3. 年齢による比較 (図3)

20代~30代、40代、50代、60代、70代~80代以上の5群に分けて比較した。

20代~30代で71% (7人中5人) が8)の「周囲の人々の話し声が聞こえる」で守られていないと感じていた。

40代では71%~86% (7人中5~6人) がすべての項目で守られていないと感じていた。5)の「家族や家庭のことを話している時」で有意に差があり守られていないと感じていた。

50代では60% (25人中15人) が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」8)「周囲の人々の話し声が聞こえること」7)「診察や処置を受けている人の様子が見えたり聞こえたりすること」で守られていないと感じていた。

60代では52% (21人中11人) が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」で守られていないと感じていた。

70代~80代以上では守られていないと感じている項目はなかった。

40代以上では「プライバシーが守られていない」と感じている人は、年代を増すごとに減少していた。

4. 性別による比較 (図4)

男性で57% (56人中32人) が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」、54% (56人中30人) が8)の「周囲の人々の話し声が聞こえること」、52% (56人中29人) が9)の「診察や処置を受けている人の様子が見えたり聞こえたりすること」で守られていないと感じていた。

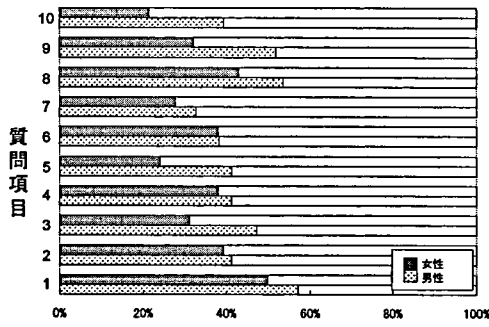


図4 性別比較
守られていないと感じている人の割合

5. 職業による比較 (図5)

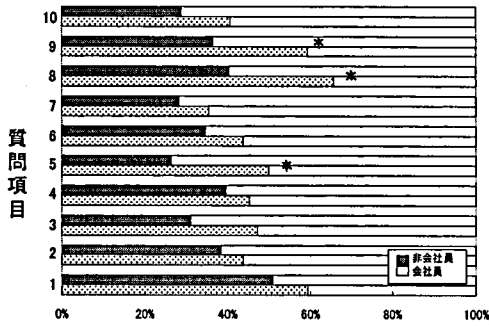


図5 会社員と非会社員との比較 守られていないと感じている人の割合
*p<0.05 非会社員n=33 会社員n=32

会社員などの組織の中で働いている人を会社員、それ以外の人を非会社員とし、2群を比較した。

会社員で66% (32人中21人)が8)の「周囲の人々の話し声が聞こえること」、59% (32人中19人)が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」と9)の「診察や処置を受けている人の様子が見えたり聞こえたりすること」で守られていないと感じていた。3項目は有意に差があり守られていないと感じていた。会社員は、他の7つの項目でも有意差はないが非会社員より守られていないと感じていた。

6. 透析経験年数別 (図6)

透析経験年数は1年未満、1年以上5年未満、5年以上の3群を比較した。

透析経験年数5年以上で57% (52人中31人)が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」、56% (52人中29人)が8)の「周囲の人々の話し声が聞こえる」で守られていないと感じて

いた。有意さはみられなかったが、透析経験年数5年以上で8つの項目において、他の群より守られていないと感じている人が多くいた。

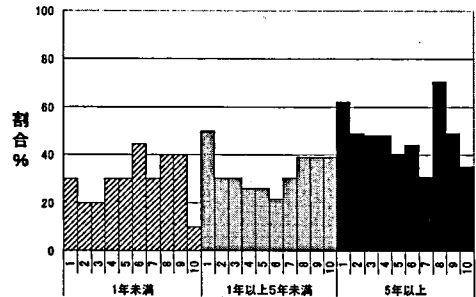


図6 透析経験年数別比較 守られていないと感じている人の割合

7. 家庭状況による比較 (図7)

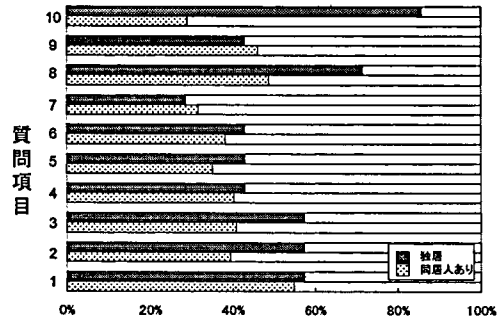


図7 同居人の有無別 守られていないと感じている人の割合

独居と独居以外の2群で比較した。

独居では86% (7人中6人)が10)の「眠りたいとき・テレビを見ていたい時・食事中・読書中に話しかけられること」で有意に差があり守られていないと感じていた。71% (7人中5人)が8)の「周囲の人々の話し声が聞こえること」で守られていないと感じていた。57% (7人中4人)が1)の「仕切りのない広い空間で透析をすること」2)の「体重測定時やベッドで体重の値を声に出すこと」3)の「体調について話す時」で守られていないと感じていた。

【考察】

1. 全体の傾向

「プライバシーが守られていない」と感じてい

る人はもっと多いと予想していたが、50%を超えたのは「仕切りのない広い空間で透析をすること」1項目であった。私たちはオープンフロアであることに慣れてしまうことなく状況に応じた配慮が必要である。また環境の改善も検討していく必要がある。

2. プライバシー志向性尺度

プライバシー志向性尺度が低得点群では予想通りプライバシーが守られていないと感じている人は少なかった。プライバシー志向性尺度が高得点群でも比較的プライバシーが守られていると感じていたのは「透析している人はみんな仲間という感じ」「同じ病気だから気にしたことない」という意見があり仲間という安心感があると考え。また「看護師がいたり声が聞こえた方が安心」という意見がありスタッフがいるための安心感や、長年対応しているスタッフへの信頼感があると考え。

3. 性別

過去の研究より「女性の方がプライバシーが守られていない」と感じていると予想していた。しかし男性と女性の差はみられなかった。「もう年だから気にしない。」という意見があり、高齢者が多いために差がみられなかったのではないかと考える。

4. 年齢

川口は「若年者の方が高齢者よりもプライバシー意識が高い傾向がみられた」と述べている。当研究では20～30代よりも40代がピークであった。20～30代は40代の次に「プライバシーが守られていない」と感じており、40代以上では年代を増すごとに減少している。川口の意見にほぼ一致していると考え。また、40代は家庭や社会において責任を求められ、プライバシーに関心が高く「プライバシーが守られていない」と感じている人が多かったのではないかと考える。

5. 職業

会社員でプライバシーが守られていないと感じていたのは、組織の中で働きプライバシーに配慮が求められる人は、自己のプライバシーについても尊重してもらいたいと考えている表れではない

かと考える。

6. 透析経験年齢

透析経験歴が短い人の方が「プライバシーが守られていない」と感じると予想していた。しかし、透析経験5年以上の人が「プライバシーが守られていない」と一番感じていた。透析経験年数が短い人では「今の環境が当たり前だと思っている」「こういうものだと思っている」という意見があり、現在の環境を受け入れてしまっていると考え。また、透析導入時は環境を考えるゆとりがもてない。しかし、透析経験が長くなるにつれQOLの向上のため透析環境の向上も望まれると考え。

7. 家庭状況

独居者が10)の「眠りたい時・テレビを見たい時・食事中・読書中に話しかけられること」の項目で「プライバシーが守られていない」と有意に感じていたのは、自分のスペースや自分の時間（自己領域）への侵入に敏感であると考え。

8. 考察全体

職業・透析経験年数・家庭状況などの個人の背景により、プライバシー意識に違いがみられた。

長年対応しているスタッフへの安心感や信頼感がある一方、QOLの向上のため透析環境の向上も望まれている。私たちは個人の背景をふまえて意向を聞きながら配慮していく必要がある。

【結論】

1. 全体の傾向としてオープンフロアという環境に対して「プライバシーが守られていない」と感じている人が多い。
2. 透析患者の中で若い年代や、組織の中で働いている人、独居の人は「プライバシーが守られていない」と感じていた。
3. プライバシー意識は個人に起因しているものであり、個人の背景を踏まえて意向を聞きながら配慮していく。また、環境面では「オープンフロア」の対策を検討していく。

【引用・参考文献】

- 1) 国際看護師協会：看護師の規律、1975.
- 2) 川口孝泰：病室におけるテリトリー及びプライバシーに関する検討、日本看護研究学会雑誌、vol13、no1、1990.
- 3) 堀洋道監修、吉田富士夫編、吉田圭吾：「プライバシー志向性尺度」、心理測定尺度集Ⅱ、サイエンス社、1996.
- 4) 川口孝泰：ベッドまわりの環境学、医学書院、36・54、2004.
- 5) 村田明子：現代人のプライバシー意識と病室空間、看護展望、vol12、no4、1987.
- 6) 小川圭子：看護における患者のプライバシー尊重、看護教育、26（8）、464・468、1985.
- 7) 上田由香里：入院患者のプライバシー意識、第22回日本看護学会集録（看護総合）、日本看護協会、214・216、1991.
- 8) 亀山絹代：入院患者のプライバシーに関する意識調査、臨床看護、22（2）281・286、1996.